

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 16 日現在

機関番号：32601

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25284064

研究課題名(和文) 現代フランス小説 第二次大戦および戦後の記憶の再編成の視座から

研究課題名(英文) Contemporary French Novel : a perspective of the memory of war and after war

研究代表者

國分 俊宏 (KOKUBU, Toshihiro)

青山学院大学・国際政治経済学部・教授

研究者番号：70329043

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究のテーマは、1990年以降のフランス文学において、第二次世界大戦を中心とする戦争の記憶がどのように文学作品の中で表象されているかを明らかにすることである。90年代から2000年代にかけて発表された小説作品を主に取り上げ、歴史の記憶と文学との関係を研究した。二度の研究セミナーを開き、研究発表・討議を行ったほか、総括として外部のスピーカーを招き、シンポジウム形式の公開研究会を開催した。また、研究論文を4本発表したほか、外部のシンポジウム等に招かれ、4件の発表を行った。

研究成果の概要(英文)：The aim of this study is to clarify the characteristics of the representation of the war (especially World War II) in the french novels which are published after 90's. We worked on several novels appeared in 90's and the first decade of 21th century in France and reviewed the relationship between the history and the literature. We organised two seminars and a symposium to have discussion. We also published 4 papers and participated in 4 other symposium held by other organisations.

研究分野：フランス文学

キーワード：現代文学 戦争 記憶 語り 表象 歴史

1. 研究開始当初の背景

フランス文学は、国際的な世界の構造の変化や人びとの意識の移り変わりを反映しつつ、現代社会の抱える諸問題に鋭敏に反応し、それに文学独自のやり方で応えようとしてきた。だが、日本ではヌーヴォー・ロマン以降、同時代のフランス文学がどのような状況にあるのかを、わかりやすく総合的かつ具体的に提示しようとする試みはほとんどなされていないのが現状である。フランスの同時代の文学、ことに小説が、どのような問いを抱え、どのような試みをし、どのような成果を挙げているのか、それをしっかりとした個別作品研究を踏まえたうえで、概観的な展望も得られるような形で描き出したい、そういう思いを本研究の共同研究者たちは共通して抱いてきた。では、現代フランス文学、より正確にはむしろ「フランス文学の現在」として、どのような見取り図が考えられるか。そして「現在」としていつ頃の年代を設定できるか。一つの目安として浮かび上がるのが1989年である。この年はいわば世界史的な区切りとして大きな意味を持っている。ヨーロッパにおいてはベルリンの壁が崩壊し、中国では天安門事件が起こり、欧米を中心とする国際社会から強い非難を浴びた。ソ連が崩壊するのはその2年後の1991年である(ポーランド、ハンガリー、チェコスロバキア、ルーマニアで次々と社会主義政権が崩壊したのは1989年)。こうした世界史的状況の中で、フランスにおける89年ないし90年代以降にもやはり大きな変化の兆しを読み取ることができる。そもそもフランス革命200周年にあたるこの年、フランスもまた歴史を否応なく振り返り、強い歴史意識を持たざるをえない年であったことは指摘しておくべきだろう。そうした中で、「フランスの90年代以降」を浮かび上がらせる指標として、第二次大戦以後の現代史の捉え直しが盛んにおこなわれるようになったことが挙げられる。レジスタンス神話、共和国神話がいわば次々と破壊された。たとえば、シラクが大統領になり、ヴィシー政権時代にフランス人によるユダヤ人の連行があった事実(いわゆるヴェルディヴ事件)を「フランス国家」が犯した過ちとして公式に認めた。モーリス・パポンの裁判が始まった。アルジェリア事変(événements d'Algérie)が正式にアルジェリア戦争(guerre d'Algérie)と認められた。あるいはネガシオニズムを罰する法律ができた。逆に(これは批判を浴びたが)植民地支配の肯定的側面を歴史の授業で教える法律ができた……等々。

こういう動きを背景にして、90年代以降、現代史と記憶の問題が盛んに論議されるようになったのである。もちろんこうした論議は80年代から準備されたものであるにせよ(例えば、従来のヴィシー政府の評価に大幅な見直しを迫ったHenry RoussoのLe Syndrome de Vichyの刊行は1987年)、90年代になっ

て噴出した感がある。フランスの言論界で「記憶の義務」という言葉が盛んに口にされるようになったのもほぼ90年代以降のことである。思想界では、こうした論議を受けとめて2000年にポール・リクールが『記憶・歴史・忘却』(*La mémoire, l'histoire, l'oubli*, Paris, Seuil)という大著を出版している。こうした言論・思想、あるいは社会の動向と、小説は無縁ではない。90年代になると、第二次大戦を肌で体験した世代が社会から退場していく、あるいは端的に亡くなっていく。臃になっていく過去の記憶、公にしにくい負の記憶、自分のものではない他者の記憶などを、どのように語りとして組織しなおすか、というのは、かなりの数の作家が共有していたテーマだったはずだ。2006年にゴンクール賞を受賞し、話題となったジョナサン・リテルの『慈悲の女神たち』(*Les Bienveillantes*)も、このような言説空間の中で胚胎し、受容されたのではないだろうか。また、アウシュヴィッツで亡くなったイレース・ネミロフスキーが1942年に執筆した『フランス組曲』(*Suite française*)の原稿が発見され、2004年に刊行されて遅ればせのベストセラーとなったのも、こうした状況と無縁ではないはずである。

こうして「記憶」ないし「歴史」(その表象の再編成)を軸にして、90年代~2000年代のフランス小説の特徴を描き出すことが可能ではないかというのが、本研究を着想した背景である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、現代フランス小説、特に1989年(冷戦終結)以降のフランス小説について、具体的かつ総合的な作品の個別研究と概観的研究を行い、その特質や傾向などに関する展望を得ることである。特に本研究では、89年以降のフランス小説の顕著な特徴として認められる、第一次世界大戦・第二次世界大戦やアルジェリア戦争、およびそれにまつわる大量虐殺や一斉検挙などの歴史的な出来事をモチーフとした小説群の活発な刊行に焦点を当てる。こうした歴史的な(負の)記憶をあらためて掘り起こし、語り直そうとする作家たちの営為の背景には何があり、またその作品群は文学に何をもたらしたのか。語りによる記憶の再編成という文学の本質に関わる視座から、そうした営為の意味を明らかにし、現代文学の探求の射程を描き出すことが本研究の目的である。

3. 研究の方法

89年以降(すなわち実質的には90年代以降)のフランス小説において、「記憶・歴史」の表象にかかわる作品群の個別的な分析を行う。同時に、それらの作品群を生み出した社会的背景の理論化を試みる。その理論化の作業は、リストアップされた作品群を読み込む作業と平行して行われる。そうした実作の読

解・分析と理論的作業との往復運動が、本研究の実質的な作業となる。戦争の記憶の再編成に関わる作品群として、たとえば、Jonathan Littell, *Les Bienveillantes* (2006) ; Lydie Salvayre, *La Compagnie des spectres* (1997) ; Francois Thibaux, *Notre-Dame des Ombres* (1997) ; Denis Lachaud, *J'apprends l'allemand* (1998) ; Pierre Assouline, *La Cliente* (1998)* ; Jacques-Pierre Amette, *Les Deux Leopards* (1997) ; Marc Lambron, *1941* (1997) ; Chantal Chawaf, *Le Manteau noir* (1998) ; Philippe Grimbert, *Un secret* (2004)*などを取り上げ、分析する(*は邦訳あり)。こうした作品群が現代フランスの社会と文学の両面においてどのような意味を持つかを明らかにし、その成果を論文や研究会、シンポジウムなどで発信する。

一方で、上記のような作品のフランスでの研究成果や、理論的な著作としては、Paul Ricoeur の大著 *La mémoire, l'histoire, l'oubli* (Paris, Seuil, 2000) のほか、Dominique Viart, *La littérature française au présent* (Bordas, 2006) の一章「Ecrire l'histoire」や *Le Roman français au tournant du XXIe siècle* (Presses Sorbonne Nouvelle, 2004) などがある。これらの先行研究を批判的に検証し、依拠することになる。

また、現代史と記憶というテーマにおいて映像の意義は大きく、特に戦争の表象においてはそのインパクトは計り知れない(実際、上記作品のいくつかは映画化されている)。そのため、本研究では、小説と映画の交渉にも目を向ける。

以上をまとめ、より具体的な作業として項目を提示すれば、下記の三項目が挙げられる。

(1) 上記 12 編の小説を中心とする作品分析と比較研究

(2) 社会的背景の検討、および社会的背景と小説の関係の解明

(3) 映画やドキュメンタリー等、映像資料の活用・分析

これらの作業によって、「現代小説における歴史の記憶の表象」というテーマに関するまとまった展望を提示する。

4. 研究成果

3 年間の研究活動と成果を以下に年度ごとに記す。

【2013 年度】

研究を開始するにあたって、研究代表者・研究分担者全員が集まる第 1 回の打ち合わせを 5 月 31 日に開き、活動方針等について話し合った。その後、メールによる何度もの打ち合わせを経た末、第 1 回研究報告セミナーを 8 月 9 日に開催した。そこで、研究代表者の國分俊宏は、Lydie Salvayre の *Companie des spectres* について、研究分担者の渋谷豊は、Irene Nemirovsky、三ツ堀広一郎は、Patrick Modiano、谷口亜沙子は、Marcel Ophuls のド

キュメンタリー映画「悲しみと哀れみ」について、それぞれ発表を行い、ほぼ丸一日かけて議論を交わした。

2013 年度の後期に入ると、國分が在外研究でパリに滞在することになったため、メールによるやりとりが主な打ち合わせの場となった。メールでの頻繁なやりとりで各自の進捗状況を報告しながら、國分は主に第二次世界大戦の体験者による文学作品の読み直しと、ここ数十年の新たな作品の読解を並行して進め、渋谷、三ツ堀は 2000 年代以降の小説を、谷口は主に映像作品と戦争に関する新たな証言や研究報告を、それぞれ主な対象として研究を続けた。

そうした中で、現代小説としては全員が共通して読んだ Laurent Binet の「HHH」が、非体験者がいかにして文学作品としての記録を残すかという問題意識において画期をなす作品であるという共通認識に到達した。また、ここ数十年のこの種の文学の盛り上がりには、すでに戦争を父母の記憶としても経験していない「第三世代」の台頭が背景にあるのではないかと仮説も浮かび上がり始めた。これを「第三世代仮説」と名付け、われわれの共通認識とした。

【2014 年度】

研究代表者の國分は、9 月 27 日に青山学院大学で開かれたシンポジウム「『私はホロコーストを見た』ヤン・カルススキの黙殺された証言」に登壇し、フランスにおけるカルススキの位置づけ、ホロコースト教育の現状等について発言と討論を行った。ポーランドとフランスを横断的に解説し、欧州全体の中で戦争を考える意義を強調した(他の参加者は、クリストファー・スピルマン九州産業大学教授、作家・ドイツ文学者の池内紀氏、割田聖史・青山学院大学文学部史学科准教授)。ヤン・カルススキは、フランスの現代作家ヤニック・エネルが書いた小説『ヤン・カルススキ』(2004)の主題であり、エネルの小説は、まさに本研究が対象とする作品群の一つであるため、時宜を得て発表する機会を得たことは幸いであった。

研究分担者の谷口は、4 月より在外研究で 1 年間パリに滞在することになったが、パリを中心に多くの戦争記念館等の施設やセミナーなどに精力的に参加し、複数の研究者と直接交流する機会を得た。特に戦争関連のドキュメンタリー作家ミカエル・ブラザン氏とは数回にわたりインタビューを実施し、有益な意見交換を行った。また、小説研究に関しては、当初計画で割り振られていた通り、ユベール・マンガレリの『冬の食事』に関する学術論文をまとめ、獨協大学の紀要に発表した。これは、『冬の食事』を丹念に読みこんだ上、ラウル・ヒルバーグ(『ユダヤ人の絶滅』上下)等、先行する歴史学の成果も取り入れた優れた論文であり、またマンガレリについてほとんど本邦初の本格的な論文であった。研究分担者の渋谷は、主に比較文学的な観点

から、日本の戦争文学との関連でフランスの戦争文学の読み直しを進めた。

研究分担者の三ツ堀は、小説作品のうち、特にアントワヌ・ヴォロディーヌについて研究を進め、2015年1月にヴォロディーヌ本人が来日した機会に東京大学駒場キャンパスで、作家本人を囲む形で開かれたシンポジウム「ポスト・エグゾチスム：展望と課題 アントワヌ・ヴォロディーヌを囲んで」に、研究代表者の國分とともに参加し、発表・討議を行った。第二次世界大戦、特に全体主義と核兵器を潜り抜けたあとの世界を土台に近未来的な想像力を発揮した作品を書き続けているこの作家の文学世界を、三ツ堀は「シャーマニズム的語り」の観点から分析し、國分は「祈りと文学」というテーマで論じた（このシンポジウムにはほかに、フランソワ・ピゼ東京大学准教授、ティエリー・マレ学習院大学教授がパネリストとして参加し、日本語とフランス語の両言語を使って通訳付きで行われた）。

【2015年度】

最終年度としての総括に向けて、まず9月14日、青山学院大学にて第2回研究発表セミナーを開催した。各研究分担者がこれまで研究期間全体を通じて研究してきた自身の研究課題についてまとめ、発表を行った。

國分は、ヴェルディヴ事件を題材とした小説作品と映画作品を取り上げ、国家の負の記憶と文学の関係を考察した。また、そうした研究成果を大学の講義に取り入れ、活用していることを報告した。

洪谷は、家族の系譜にこだわる作家ジャン・ルオーを中心に第二次世界大戦の表象の一例を検討した。ジャン・ルオーは第一次世界大戦を経験した祖父を描いた『名誉の戦場』（1990）が有名だったが、第二次世界大戦の表象に関わる作家としても豊かな可能性があることが確認された。

谷口は、2013年の生誕百年に再刊されて急速に再評価が進んだ作家シャルロット・デルボを取り上げ、女性による収容所の証言について研究を行った。谷口はまた、2015年9月に渡仏し、第二次世界大戦についてのドキュメンタリー作家の第一人者であるミカエル・プラザン監督に面会し、最新作「ダス・ライヒ」および現在準備中の作品について話を聞く機会を得た。小説のデルボ、映画のプラザン、ともに近年になって脚光を浴びている作家であり、このテーマにおいて他の者がまだ手を付けていない最新の研究であると言える。三ツ堀は、パトリック・モディアノやクリストフ・ボルトンスキを題材に、第二次世界大戦フランスのユダヤ人が経験した苦難についての文学的成果を掘り下げた。三ツ堀はまた、2015年11月に渡仏し、パリ第4大学のジャン＝フランソワ・ルウェット教授と面会して、ヴィシー時代のフランスに関する研究について意見交換し、研究上のアドバイスを得た。

こうした成果を背景に、いよいよ研究の総括として、11月28日、東京工業大学にて、外部から安原伸一郎・日本大学准教授をゲスト・スピーカーに招き、シンポジウム（公開研究会）を開催した。本研究と非常に近いテーマで研究を行っている若手文学研究者の安原氏からは、第二次世界大戦中のフランスの子どもたちをめぐる表象というテーマで研究発表をしていただいた。その後、全員での討議に移った。聴講者は主に大学院生やほかの大学の研究者らであったが、外部のスピーカーを交え、公開での議論をすることで、歴史と文学をめぐる問題について幅広いさまざまな角度から討議を行うことができた。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 3 件)

谷口亜沙子 「ユベール・マンガレリ『冬の食事』 ホロコーストにおける「草の根」の執行者たち」、『フランス文化研究』第46号、2015年、pp.45-69

Asako Taniguchi, 《Mlle Yamashita, pianiste de films muets》、*Soleils Levants*, 2014年5月号、pp.33-35

渋谷豊、「現代フランス小説における第二次世界大戦の表象 ジャン・ルオー『偉人伝』の場合」、『信州大学人文科学論集』第3号（通巻50号）2016年、pp.89-111

〔学会発表〕(計 4 件)

國分俊宏、「フランスにおけるヤン・カルスキ」、『私はホロコーストを見た』ヤン・カルスキの黙殺された証言、2014年9月27日、青山学院大学青山キャンパス

國分俊宏、「ヴォロディーヌ、死者の追悼と祈り」、『ポスト・エグゾチスム：展望と課題 アントワヌ・ヴォロディーヌを囲んで』、2015年1月16日、東京大学駒場キャンパス

三ツ堀広一郎、「ポスト・エグゾチスムとシャーマニズムの問い」、『ポスト・エグゾチスム：展望と課題 アントワヌ・ヴォロディーヌを囲んで』、2015年1月16日、東京大学駒場キャンパス

三ツ堀広一郎、「基調報告：記憶の表象 戦争と文学」、『フランス文学における戦争の記憶・公開研究会』、2015年11月28日、東京工業大学大岡山キャンパス

〔図書〕(計 2 件)(分担執筆および翻訳書を含む)

鈴木雅雄、塚本昌則編『声と文学』（水声社、2016年発行予定）谷口亜沙子、「シャルロット・デルボ アウシュヴィッツを「聴く」証人」（現在校正刷りのため掲載ページ数は未確定）

渋谷豊、翻訳『人間の大地』（サン＝テグジュペリ著）光文社、2015年、349頁。

〔産業財産権〕

出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等 なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者 國分俊宏 (KOKUBU, Toshihiro)
(青山学院大学・国際政治経済学部・教授)

研究者番号：70329043

(2) 研究分担者 渋谷豊 (SHIBUYA, Yutaka)
(信州大学・人文学部・准教授)

研究者番号：70386580

(3) 研究分担者 三ツ堀広一郎 (MITSUBORI, Koichiro)
(東京工業大学・外国語教育研究センター・准教授)

研究者番号：40434245

(4) 研究分担者 谷口亜沙子 (TANIGUCHI, Asako)
(獨協大学・外国語学部・准教授)

研究者番号：10453995